

Title	Does Format Matter? : トマス・マロリー『アーサー王の死』1816年版Walker editionの判型を解説する
Sub Title	Does Format Matter? : the format of the Walker edition (1816) of Malory's Morte Darthur
Author	不破, 有理(Fuwa, Yuri)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2016
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 英語英米文学 (The Hiyoshi review of English studies). No.68 (2016. 10) ,p.1- 24
JaLC DOI	
Abstract	<p>Sir Thomas Malory's Le Morte Darthur was printed in 1485 by William Caxton the first printer in England. Between then and 1634 five subsequent editions were reprinted, but there followed a long hiatus between the 1634 edition by William Stansby and its reprinting in 1816. Interestingly, not one but two editions were published almost simultaneously in 1816 ; the first to appear was the Walker edition, and the second the Wilks edition. A "mystery" has surrounded the publication of these two editions ; Joseph Haslewood, the editor of the Wilks edition, complained in the Advertisement that it was only after his edition had entered the printing process that some other publisher, trying to forestall him, began printing a rival edition of Malory. In order to verify the validity of Haslewood's claim, i.e. to ascertain whether a printing that was started earlier could have been overtaken by a rival edition, it is vital to determine the format of each edition, from which it is possible to calculate the time of imposition and printing.</p> <p>Both of these editions, so similar in size (small pocket size) and engraved vignettes, tend to be regarded as having been printed in the same format. The British Library catalogue, for example, records both editions as 12° (duodecimo), whereas nineteenth-century editors list them variously as 12° or 24° (twenty-fourmo). The present paper, which includes photographic images, provides a record of an anatomical examination of a copy of the Walker edition, and concludes that the Walker edition is of the format described by Philip Gaskell, i.e. "Two half-sheets of twenty-fours, imposed the sixteen way and worked together (24° in 12s the 16 way, 2 sigs.)," and that theoretically, the choice of this format enabled the Walker edition to be published earlier than the Wilks edition.</p>
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030060-20161031-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030060-20161031-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# Does Format Matter?

——トマス・マロリー 『アーサー王の死』  
1816年版 Walker edition の判型を解説する

## 不 破 有 理

### I はじめに

#### (1) 1816年版の出現

アーサー王伝説は芸術・文化のみならず、広く人口に膾炙している。いまなお、人々の創造力に訴えかけるアーサー王伝説。その伝播に貢献した源泉が英文学ではサー・トマス・マロリーによる『アーサー王の死』(Sir Thomas Malory, *Le Morte Darthur*)である。1485年に英国初の印刷業者ウィリアム・キャクストン(William Caxton)によって印刷されたマロリーのテキストは、以降、6度上梓されるが、1634年を最後にマロリーのテキストの出版は途絶え、18世紀はマロリー不在の世紀となる。そしておよそ2世紀の時を経て登場したのが、1816年、しかも2社から、ほぼ時を同じくして、外見もほぼ同じ袖珍本に似せた小型ポケット版として刊行された。ウィルクス(Wilks)版とウォーカー(Walker)版である。

1816年の2月に刊行されたのがウォーカー版で、遅れて5月に刊行されたのがウィルクス版である。これら1816年の『アーサー王の死』は読書の大衆化とともに幅広い読者を獲得し、19世紀の華々しいアーサー王物語の復活に貢献することとなる。

そのテキストの出版をめぐる競争には「謎」が存在した。期せずして後発版となってしまったウィルクス版の編集者ジョゼフ・ヘイズルウッド (Joseph Haslewood) は自らの序文でライバル版出現への憤りを記している。すなわち、ヘイズルウッドが『アーサー王の死』のポケット版を刊行することを察知した大手印刷出版業者は、急遽ウォーカー版の印刷を決定し、ヘイズルウッドのささやかな努力を徒党を組んで台無しにしたと、興奮冷めやらぬ筆致で記しているのである。

ウォーカー版は表紙に出版者ジョン・ウォーカー (John Walker) の名前を筆頭に、全 17 社の出版業者が名前を連ねているが、実質ロングマンが出版の采配を握っていたようだ。ウォーカー版の出版記録はロングマン社のアーカイブに保存されており、ロングマンの帳簿には 1816 年 2 月 22 日に経費と出版分担者への配布数が記録されている<sup>1)</sup>。この記録から判断すると、ウィルクス版の序文に付された日付 1816 年 5 月 14 日よりも 3 か月近く前に印刷を終えたことになる。仮にヘイズルウッドの記述が信頼に値するのであれば、ヘイズルウッドの企画を知った後に、ライバル版の出版者はウォーカー版の印刷に着手し、ウィルクス版に追いついたのみならず、追い越したことになる。このような印刷出版のシナリオは技術的に実現可能なのだろうか。詳細な出版事情は別稿に譲るが<sup>2)</sup>、まずこの疑問に答えるために要となる、書物の判型を特定することを本稿の目的とする。

## (2) 判型とはなにか

判型 (Format) とは、書物の構造を知る手がかりとなる基本単位である。印刷から製本までの手順は、簡単にまとめれば、活字を組版に組んで印刷全紙に片面ずつ印刷し、インクと紙を乾燥させた後、その印刷全紙 (sheet) を折りたたんで丁 (gathering) を作り、丁と丁をまとめて糸で綴じると 1 冊が完成する。判型とは、書誌学者ジョン・カーター (John Carter) のことばを借りれば、*“the structure of a volume in terms of the number of times the original printed SHEET has been folded to form its constituent*

leaves”である<sup>3)</sup>。判型が特定できれば、丁の構成が判明し、印刷全紙の片面に印刷されたページ数を知ることができる。1シートあたりのページ数が判れば、組版に要する時間も割り出すことができるので、出版にいたるまでの所要時間を算定することが可能である。となれば、ウィルクス版とウォーカー版の印刷所要時間の差異を推定する一助となるのである。判型を解説することは書物の成り立ちを遡及するための基本情報といえる。

### (3) 1816年ウォーカー版の判型をめぐる現状

先発のウォーカー版も後発ウィルクス版も、共に口絵挿絵入りの小型ポケット版で、手の平に納まる大きさである。ウォーカー版が2巻本で、ウィルクス版が3巻本なので巻数に差異があるが、外見上は極めて似通っている。そのためか、あるいは、判型にはことさら関心を払われることがなかったためか、両版には12折本説と24折本説の両論が併存する。19世紀のマロリーの編集者の間でも意見の齟齬がみられる。1858年に3巻本のマロリーを編集出版したトマス・ライト(Thomas Wright)は「2巻本と3巻本の二つのテキストは同じ大きさで判型は24折本」(“Both were printed in the same size, 24mo, the one in three volumes, the other in two.”)と主張している。また1868年初版のグローブ版編集者サー・エドワード・ストレイチー(Edward Strachey)もトマス・ライトの説を踏襲し、両テキストを「1816年の24折本」と総称している<sup>4)</sup>。1889-91年にキャクストン版を底本にしたマロリーのテキストを上梓し、19世紀では高く評価されたゾンマー版編集者H. オスカー・ゾンマー(H. Oskar Sommer)はウォーカー版もウィルクス版も12折本とみなしている<sup>5)</sup>。

一方、マロリーのテキスト書誌学の先駆けであるバリー・ゲインズ(Barry Gaines)はT. F. デイブデン(Thomas Frognall Dibdin)による「最近口絵入りで再版された二つの12折本」という1824年の証言を引用している<sup>6)</sup>。この説を踏襲してか、現代では2版とも12折本説が主流のようだ。事実、大英図書館のカタログ書誌情報では両版はともに12折本と記載さ

れている。はたして、二つのテキストは同じ判型なのだろうか。同じであるならば、12折本と24折本のいずれなのか、はたまた両テキストの判型は異なるのか。

目視だけでは判型は確認できず、判型が特定できなければ、ウォーカー版がなぜ出版競争に勝利したのか、という疑問に印刷の面から答えることができない。つまり、判型を特定するためには書物の解体をおこなわなければならない。かなり大胆な決断となるため長らく逡巡したが、古書市場で2巻揃いではなく1巻のみ売り出されていたウォーカー版があったため、購入のうえ解体検分することにした。本実験に先立って、ウォーカー版の出版記録の現地調査を行った。現在レディング大学に保存されているロングマン社の1816年の帳簿記録に依れば、ウォーカー版は24折本であることが推定される。この記録を裏付けるべく、古書から丁を分離し、校合をおこなった。以下はその記録と結果である<sup>7)</sup>。

## II 解体・検分実験

### (1) 準備

判型を特定するために、書誌学の碩学フィリップ・ギヤスケル (Philip Gaskell) の『書誌学新序説』 (*A New Introduction to Bibliography*) を参考に24折本の判型図63と照合することにした<sup>8)</sup>。比較照合の作業と折丁作成の再現実験用に、あらかじめ図版を拡大コピーしておいた。

また、『古書修復の愉しみ』を参考に、以下の道具を準備した<sup>9)</sup>。

- 1) 白の模造紙—古書に汚れが付着しないように保護する目的、および解体作業中の破片などが観察しやすいように机上に設置
- 2) 木工用ナイフ (細かい作業に適した先端が鋭利なもの)
- 3) 精密ピンセット (先端角度45°にカーブした刃先先端が細い実験用)
- 4) 製本用のヘラ (長いもの)—実際使用したのはヘラ部分が長く扱いやすいケーキデコレクション用のヘラ

- 5) 脱脂綿と水—背表紙の糊付けをはがす際に使用
- 6) 薄手ビニール手袋とマスク—汚れを付着させないため（さながら手術の装い）
- 7) 製本機—作業を行うために書物を固定させるため
- 8) はさみ（木工用ナイフでも）—綴じ糸を切るため、および折本を再現するために印刷シートを裁断するため
- 9) 糸と針—折りたたんだ印刷シートを実際に綴じて丁を作成し、丁のページ番号の組み合わせを再現するため
- 10) 物差し—原本の表紙とページのサイズを記録するため
- 11) デジタルカメラ—原本と解体実験の過程を記録するため

## (2) 解体手順

『古書修復の愉しみ』には以下のような解体の手順が記述されている<sup>10)</sup>。

1. リフティング・ナイフで背革を切り離す
2. 膠にでんぷんのりを塗ってラップでくるんで30分おき、やわらかくする
3. 製本用のへらで膠を削ぎ落とす
4. 止血鉗子で折丁の糸を持ち上げてはさみで切る
5. ときどき背を脱脂綿でぬらしてやわらかさを保つ

上記を参考にしつつも、今回の目的は判型解読と丁の構成の確認であるので、2丁のみ分離し、丁を解体した。まず、ウォーカー版の状態を確認しながら以下のような手順で実施した。

### 判型解読のための解体検分手順

1. 本の状態を確認  
すでに背表紙・表紙ともに製本状態は緩んでいたの、まず表紙を取り外す。

6

2. 背表紙はほぼ剥離している。いよいよ「執刀」。

画像 1



3. 背表紙と背の補強に使用された厚紙を分離するため、本体に傷をつけないように慎重にナイフで背表紙のみを切り離す。

画像 2



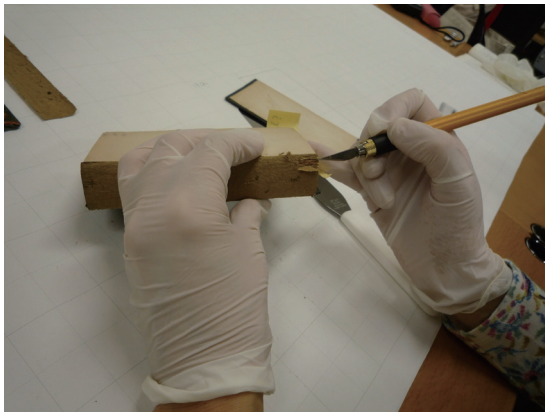
4. 厚紙と本体の間に製本用のヘラ（実際使用したのはヘラ部分が長く扱いやすいケーキデコレクション用のヘラ）を差し込み、慎重にはがしていく。

画像 3



5. 画像 4 のように背表紙に密着した厚紙をナイフでこすり取ろうとしたが、本体の丁合部分を損なう恐れが生じたので、中止。

画像 4



6. ウォーカー版を本の背を上にして製本機に固定し安定させる。水分を含ませた脱脂綿を背表紙に乗せ表面の厚紙を湿らせ、接着した厚紙が柔らかくなってから除去の作業に移ることにする。紙に水は禁物な



ので、頃合いが難しい。本体に水滴が入り込まない程度に脱脂綿に水分を含ませる。画像は製本機に固定したウォーカー版と、右側から、取り外した本表紙、背の厚紙、背表紙、ケーキデコレーション用のヘラ、木工用ナイフ。

画像 5



7. 水気を含み厚紙が柔らかくなった状態を見計らい、ピンセットを用いて丁寧に厚紙を取り除いていく。取り除いた厚紙をサンプルとして保存。茶色に変色した厚紙の下から、ウォーカー版の丁が顔を出し始める。

画像 6



8. 本の上部も順次、湿らせはがしやすくしておく。ピンセットで丁寧に厚紙部分の除去を進めると、丁と丁がしっかりと綴じ糸で結びつけられた背が姿を現し始める。

画像 7



9. 背表紙と丁を接着していた厚紙をすべて取り除いた状態。丁が5か所で背をしっかりと綴じ合わせられている様子が目視で認できる。とくに、中央と下部の綴じ糸が強化されている。

画像 8



10. 書物の冒頭は不規則な丁になりがちなので、1丁の構成が分析しやすい折丁記号Cの箇所（Walker, vol. 1, pp. 25–47）を取り出す作業に移る。丁と丁の間にピンセットを入れ緩めていく。

画像 9



11. 折丁Cを取り出そうとしたが、綴じ糸が固く、ページ同士の接着が強かった。本体の紙を破損する恐れがあったため、製本機に固定して作業することに変更。

画像 10



12. 本体ページに破れが生じないように、製本機に設置し固定した上で、綴じ糸を慎重に切り取る。罫下（ページ下の余白）に折丁記号の“VOL.I. C”が印刷されているのが見える。

画像 11



13. 折丁 C を取り出す前に、最初の折丁を取り外す準備をする。ピンセットで少しずつ綴じ糸を緩め、ナイフを入れる際に紙を切らないように隙間を作る。

画像 12



14. ピンセットで糸を引きながら、紙に切り目が入らないように注意しつつ、綴じ糸を切り、折丁記号 A と B を取り外す作業を進める。手前のページが p. 24, 奥のページは p. 25, 折丁記号 (Signature) の “Vol. I. C” が 25 ページの罫下に見える。

画像 13



15. 綴じ糸の一部を切り、丁を取り外す。背の部分に綴じ糸と糸の圧跡が残っている。

画像 14



16. 取り出した折丁 C の背が接着され固まっております、ページを開くと紙に亀裂が走る恐れがあるため、再度接着を緩ませる段階を踏むことにした。湿らせた脱脂綿を背にのせ、製本機に固定し、時間をおく。

画像 15



17. 続いて、この折丁に印刷されたページ番号の組み合わせがギヤスケルの 24 折本の判型図 63 に一致するの、確認作業に移る。

(2) 照合

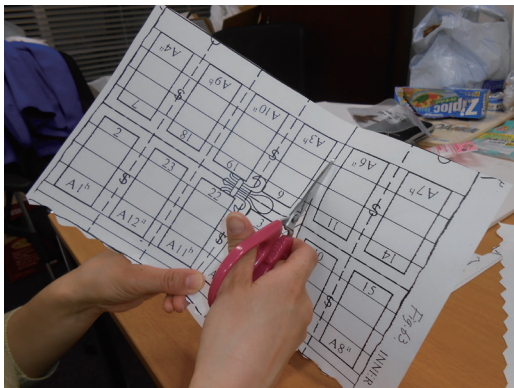
画像 16 は取り出した折丁 C。24 折本であれば、折丁 C の中央に位置する 6 葉目と 7 葉目は p. 36 と p. 37 となるはずである。予想通り、p. 36 と p. 37 が折丁の中央に位置し見開きページとなっている。中央に綴じ糸と、5 か所の綴じ穴がみえる。

画像 16



画像 17 にあるように、ギヤスケルの 24 折本判型図 63 に従って丁を再現し、ページの組み合わせ、袋の位置を確認する。まず、印刷全紙半分に切り、ハーフ・シートにする。画像は、さらに 4 葉と 8 葉に切り離しているところ。この際、右側の 4 葉は、A5b (p. 10) と A6a (p. 11), A7b (p. 14) と A8a (p. 15) が、ページ上部 (天) で密着している点に注目。これが判型図 63 の特徴である。(判型図 63 参照)

画像 17



画像 18

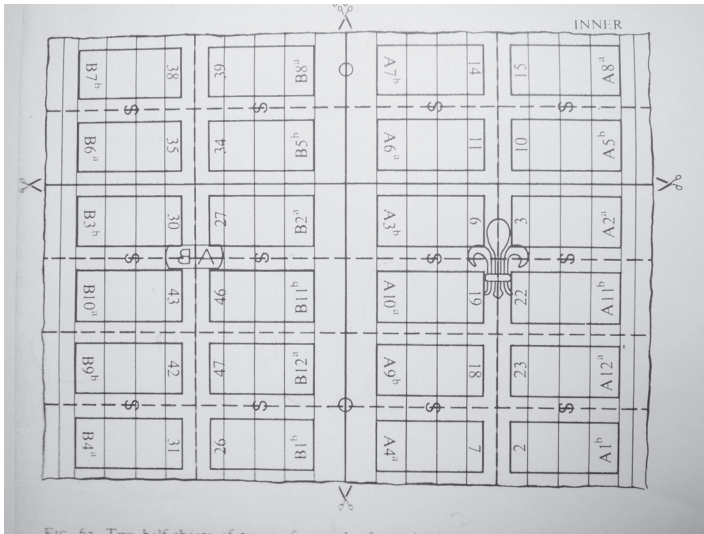


画像 18 では、判型図 63 の折丁構成と照らし合わせながら、Walker 版の折丁 C とページの組み合わせを確認していく。判型図 63 であれば、A3b (3 葉裏面) と A10a (10 葉表面) にそれぞれ p. 6 と p. 19 が印刷される。画像にあるように、ウォーカー版折丁記号 C では 3 葉裏面にあたるのは p. 30、10 葉表面は p. 43 となり、判型図 63 と同じく、対面したページ番号の差は 13 で、一致することが確認できる。以上の作業を折丁 C すべてのページ番号について確認した結果、すべて判型図 63 の組み合わせと一致した。このことから、ウォーカー版は 24 折本であることは確定できる。

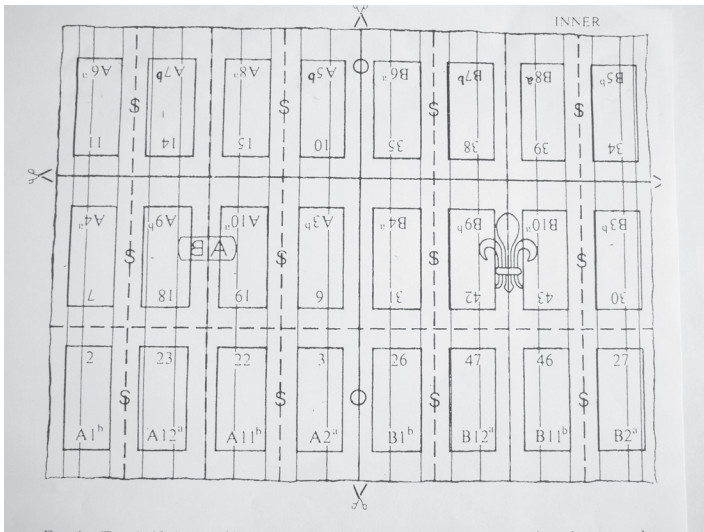
ただし、判型図 63 以外にも、ギヤスケルは 24 折本の判型として判型図 62 の例を挙げている。判型図 62 と 63 のいずれの場合も印刷された見開きページの組み合わせは同じである。そのため、24 折本のいずれの判型なのかはページ組み合わせだけでは断定できないことになる。しかしながら、両者の判型にはページの配置に相違がある。(判型図 62 参照)

前掲の画像 17 のように、ギヤスケル 24 折本判型図 63 は印刷全紙から丁を作成する際に、まず、印刷全紙を半分に切りハーフ・シートにして、さらに 4 葉と 8 葉に切り離す。この際切り離した 4 葉にあたる A5b と A6a、A7b と A8a は、それぞれ連番でページ上部が密着している。この点が図版 63 の特徴である。一方、図版 62 では該当する 4 葉は横並びとなり、A5b と A6a、A7b と A8a とのページ上部は袋にはなっていない。今回の解体結果に加え、ケンブリッジ大学図書館所蔵のウォーカー版の検査結果を突き合せると判型を決定するために有意な証拠を導くことができる。以下はその考察である。





判型図 63 (Philip Gaskell, *A New Introduction to Bibliography* より)  
 “S” は綴じ糸の位置



判型図 62 (Philip Gaskell, *A New Introduction to Bibliography* より)

ケンブリッジ大学図書館のウォーカー版 (CUL 8700.e.167-168) には幸い、未裁断の箇所が温存されていた。少なくとも 5 か所において、天が未裁断の状態、袋とじとなっていたのは以下の箇所である。いずれもウォーカー版第 2 巻の折丁である。

折丁 C

B7b (p. 38) と B8a (p. 39)

折丁 D

A7b (p. 62) と A8a (p. 63)

折丁 F

A5b (p. 106) と A6a (p. 107)

折丁 g2

B5b (p. 130) + B6a (p. 131)

折丁 h2

A5b (p. 154) + A6a (p. 155)

一見して明らかなように、天が袋になっていた箇所は判型図 63 の特徴である箇所、切り離れた 4 葉の A5b と A6a、および A7b と A8a、それぞれ連番でページ上部天が密着する箇所である。判型図 62 の場合、該当するページはいずれも隣接、もしくは並列に位置し、天を接してはいない。つまり、天袋にはなりえないページ配置である。

さらに、今回分離した折丁 C には、p. 37 と p. 32 のページ下に釘穴が残されていた。いずれも 1mm 程度の円形の穴で、印刷をする際に用紙をチンパンに固定する際にネジを差し込んだ跡の可能性が高い。p. 37 と p.

32は判型図63のB7aとB4bにあたり、ちょうど印刷用紙の四隅を占めている。チンパンに固定するためには好都合の位置である。しかし、判型図62であれば、B7aとB4bは印刷用紙の内部に位置し、紙止めは不可能である。

以上の結果を突き合せると、ウォーカー版の判型は24折本であり、その中でも判型図63、正確には、「24折ハーフ・シートで、16ページ組付と8ページ組付の組合せ、折丁記号二カ所」(Two half-sheets of twenty-fours, imposed the sixteen way and worked together, 24° in 12s the 16 way, 2 sigs.)という判型であることが判明したのである。

#### IV 判型解読の意義

以上の実験結果から、ウォーカー版の判型は24折本と確認されたが、さて、この判型解読することの意義はなにか。

本テキストは1816年に出版されたウィルクス版ともども小型ポケット版で装丁も酷似していることから、両者は同じ判型とみなされていた。しかし、実際のところ、ウィルクス版は12折本、今回の解体したウォーカー版が24折本であることから、書誌学上の記述修正が必要となる<sup>11)</sup>。さらに、事実確認上の意義のみならず、判型が決定されれば、印刷時に使用した原紙の大きさ、およびそれに対応する印刷機の推定も可能となってくる。

##### (1) 印刷全紙の復元

判型が24折本折丁記号2カ所16葉と8葉であれば、印刷に用いられた用紙のサイズを推測できる。ギヤスケルの判型図に従うと、用紙の長辺はページの高さの4倍、短辺はページの幅の6倍によって求められる。となると、判型図の長辺をなすA1a + A4b + B1a + B4bの実測丈の合計、および底辺をなすA1a + A12b + A11a + A2b + A5a + A8bの実測幅の合計によって印刷原紙の大きさが算出できるわけだ。以下は、ウォーカ

一版原装版である紙装本の折丁 C と折丁 D のページ幅の実測結果である<sup>12)</sup>。

$$\text{長辺} : A1a + A4b + B1a + B4b = 550\text{mm}$$

$$A1b + A4a + B1b + B4a = 549\text{mm}$$

$$\text{短辺} : A1a + A12b + A11a + A2b + A5a + A8b = 412\text{mm}$$

$$A1b + A12a + A11b + A2a + A5b + A8a = 412\text{mm}$$

計測結果はほぼ等しく、長辺 550mm × 短辺 412mm が印刷面積と推定できる。この面積の印刷に対応できる当時の印刷機は、イングランドで発明され広く実用化された 19 世紀初頭のスタナップ印刷機である可能性が高い。スタナップ印刷機は活字の密度が高いテキストを精緻に印刷できる特徴があるので、新聞の印刷などに適していた。ただし、必ずしも、出版者が期待したほどには、劇的に印刷速度の向上にはつながらなかったとギャスケルは指摘している<sup>13)</sup>。となると、1816 年の『アーサー王の死』の後発版テキストの編者ヘイズルウッドの憤りはどのように説明できるのか。

## (2) 印刷速度への影響

ウォーカー版の判型と同定できた判型は「24 折本のハーフ・シート」である。ハーフ・シートとは、文字通り、この判型の場合、印刷全紙の半分を 1 丁分にあてる組版印刷の方法で、印刷全紙では 2 丁分の活字を組み印刷することになる。24 折本をハーフ・シートで組版を作れば、1 回の印刷で片面 24 ページ、両面では 48 ページが印刷できる。12 折本にくらべ、植字工と印刷工の人数が同じと仮定してもはるかに速く植字から印刷までを完遂することができることが試算で判明した<sup>14)</sup>。印刷日数を計算するためには、書物の基底をなす判型情報が必須である。結局、ロングマンと一印刷業者ロバート・ウィルクスの競争はロングマンに軍配が挙がった。そしてこの勝敗を決した一つの要因が判型の選択の相違だったのである。

このたびの調査によって、出版から 200 年の間、不問に付されていた

ウォーカー版の判型が明らかになり、書誌学的見地から19世紀初頭からのアーサー王伝説の復活に寄与したテキストの印刷事情の一端が明らかになれば幸いである。

#### Appendix：接着剤の分析

今回の判型特定作業の過程で、除去した背表紙と本体の丁を接着させていた厚紙について、残存する接着剤の検査をした。合成接着剤は20世紀まで製造されなかったという接着剤の歴史および書物史に鑑みて、19世紀における製本の接着剤には膠を使用した可能性が最も高い。膠は煤と練り合わせて墨を製造したり、絵の具を定着させる際に用いられるなど古今東西、美術とのつながりも古い<sup>15)</sup>。今回の接着剤成分の検査は書物の判型特定の過程で生じたため、簡易実験にとどめた。詳細な成分表示には至っていないが、慶應義塾大学理工学部中央試験所と大場茂教授のご協力によって可能となった考察結果を、以下に謝意を込めて記録したい。

中央試験所のご好意で検査した赤外線吸収スペクトル (FTIR) では、その測定結果に一番近いと判定されたのが「サファゾリン」である。この構造式は、大場教授によると、アミド結合 (-CO-NH-) を2か所もち、タンパク質に多数含まれる構造部位である。特徴としてIR吸収帯として表れやすいという。膠の原料は動物の骨、皮、腸、腱などで、当然のことながら、動物性タンパク質である。

膠は塗布後に短時間で強い接着力を示し、「水溶性の接着剤で、耐水性に劣ること」、「時間経過にともない褐色を呈する性質」がある点も大場教授にご教示いただいた。今回の実験で、背表紙から丁の接着面を緩める際に水分を含んだ脱脂綿をしばらく載せておくだけで、表面から剥離しやすくなったのも、耐水性に劣る膠の性質とも矛盾せず、かつまた、出版から200年を経た書物の厚紙を接着した膠は茶褐色に変色していた点でも<sup>16)</sup>、あらためて19世紀初期の製本に膠が使用されたことが再確認できたといえる。

呈色反応の実験をしてくださり、文献をご教示下さった慶應義塾大学化学教室大場茂教授と小島りか博士に改めて謝意を表したい。

注

- 1) Reading University Library 所蔵 Longman Archive, H8: Impression Book No. 5: 249.
- 2) 本実験から判明した 1816 年版の判型から探るウィルクス版とウォーカー版の印刷競争および、19 世紀初頭の小型本出版事情などについては、1816 年 1817 年の復刻版解説編で詳述したので参照していただきたい。「『よみがえる中世』—中世主義 ロマン派～ヴィクトリア朝文献復刻シリーズ」(*Medievalism in the Romantic and Victorian Periods.*) *The Morte Darthur: A Collection of Early Nineteenth-Century Editions* (Tokyo: Edition Synapse/Eureka Press, 2016 年秋刊行予定).
- 3) J. Carter and N. Barker, *ABC for Book Collectors*, 8th edn., (New Castle, DE: Oak Knoll, 2004), p. 107. 次の書にも format についてわかりやすい説明がある。山田昭廣『本とシェイクスピア時代』(東京大学出版会, 1979 年), 2 章.
- 4) Thomas Wright, ed., *La Mort D'Arthure, The History of King Arthur and of the Knights of the Round Table: Compiled by Sir Thomas Malory*, 3 vols. (1858; London: Gibbings, 1897), vol. 1, p. xii. Sir Edward Strachey ed. and intro., The Globe edition, *Le Morte d'Arthur* (1868; London: Macmillan, 1899), p. xxxii.
- 5) *Le morte Darthur by Thomas Malory ; the original edition of William Caxton*, edited with an introduction and glossary by H. Oskar Sommer (London: David Nutt, 1889–1891; AMS Press, 1973), vol. 2, p. 2.
- 6) T. F. Dibdin, *The Library Companion; or, the Young Man's Guide, and the Old Man's Comfort, in the Choice of a Library*. 2nd ed., (London: Printed for Harding, Triphook, and Lepard, 1825), p. 6. Barry Gaines, *Sir Thomas Malory: An Anecdotal Bibliography of Editions 1485–1985* (New York: AMS Press, 1990), p. 16.
- 7) 判型解説への後押しをしていただいた慶應義塾大学名誉教授高宮利行先生、および池田早苗氏に謝意を表したい。また本解説検分には、慶應義塾大学文学部図書館・情報学専攻の安形麻理氏と池田早苗氏の協力のもと 2015 年 4 月 29 日に実施した。両氏には書誌学上の助言もいただいた。
- 8) Phillip Gaskell, *A New Introduction to Bibliography* (1972; New Castle,

Delaware: Oaknoll Press, 2007), p. 105. 以下, Gaskell と省略。

- 9) アニー・トレメル・ウィルコックス, 『古書修復の愉しみ』市川恵里訳 (東京: 白水社, 2004), pp. 19–20.
- 10) 『古書修復の愉しみ』, pp. 19–21.
- 11) ウィルクス版の判型が 12 折本であることは, 別の調査によって明らかになった。注 2 『アーサー王の死』復刻版解説編を参照。またウィルクス版の調査の詳細は別稿に改めたい。
- 12) 1816 年の紙装本が現存すること自体が非常に稀である。稀少本である紙装版のウォーカー版の実測させていただいた高宮利行教授に謝意を表したい。
- 13) Gaskell, p. 198
- 14) 詳細は注 2 の拙論を参照。
- 15) 河原一樹「膠コラーゲンの文化財・歴史科学への応用」*Peptide Newsletter Japan*, No. 81 (2011 年 9 月): 1–4.
- 16) 見城敏子「にかわの劣化と顔料の変褪色」『保存科学』第 12 号 (1974): 83–94.

*Synopsis*

Does Format Matter? :  
the Format of the Walker Edition (1816) of  
Malory's *Morte Darthur*

Yuri Fuwa

Sir Thomas Malory's *Le Morte Darthur* was printed in 1485 by William Caxton the first printer in England. Between then and 1634 five subsequent editions were reprinted, but there followed a long hiatus between the 1634 edition by William Stansby and its reprinting in 1816. Interestingly, not one but two editions were published almost simultaneously in 1816; the first to appear was the Walker edition, and the second the Wilks edition. A "mystery" has surrounded the publication of these two editions; Joseph Haslewood, the editor of the Wilks edition, complained in the Advertisement that it was only after his edition had entered the printing process that some other publisher, trying to forestall him, began printing a rival edition of Malory. In order to verify the validity of Haslewood's claim, i.e. to ascertain whether a printing that was started earlier could have been overtaken by a rival edition, it is vital to determine the format of each edition, from which it is possible to calculate the time of imposition and printing.

Both of these editions, so similar in size (small pocket size) and engraved vignettes, tend to be regarded as having been printed in the same format. The British Library catalogue, for example, records both



editions as 12° (duodecimo), whereas nineteenth-century editors list them variously as 12° or 24° (twenty-fourmo). The present paper, which includes photographic images, provides a record of an anatomical examination of a copy of the Walker edition, and concludes that the Walker edition is of the format described by Philip Gaskell, i.e. “Two half-sheets of twenty-fours, imposed the sixteen way and worked together (24° in 12s the 16 way, 2 sigs.),” and that theoretically, the choice of this format enabled the Walker edition to be published earlier than the Wilks edition.